

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和五十八年十二月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四一三号)

目 次

如来の誓願の薬は能く 智愚の毒を減するなり	……	近角常観	……	(1)
あゆみの跡	……	白杵祖山	……	(6)
信仰体験録	……	安波勲八	……	(10)
青蓮華(五)	……	井上善右子門	……	(13)
慈光日誌抄 ——無相さんのお手紙——	……	西元宗助	……	(16)
随想断片	……	花田正夫	……	(21)

慈

光

第三十五卷

第十三号



## 如来の誓願の薬は能く 智愚の毒を滅するなり

親鸞聖人は自由放縦に陥りたる邪見の輩が、わざと好みて悪をつくりて、往生の業とすべしと高調したとき、これを誡めて、薬あればとて毒を好むべからずと教誨せられた。これはいうまでもなく、罪惡の者を救済し給う不思議の本願たることを十分に徹底せずして、罪惡を犯してもよいと自分免許に、放縦に流れた邪見である。わざと好みて悪を作るといふのが、業報を自覚しない。罪惡觀のない証拠である。

若し本願の不思議が徹底したならば、そくばくの業をもちける身なりと業報を自覚し、我身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠却より以来常に没し、常に流転して、出離の縁あることなしと、罪惡自覚の念を生ずるのである。

この如く業報を自覚したものが、わざと好んで悪を作るはずがない。何となれば一分一厘も自由にならぬ業報の身たることを自覚するからである。又罪惡觀に徹底した者であれば、地獄は一定すみかぞかしと、ドン底に墮ちた自覚

縦を許してくれると甘えて居る者は、わざと好みて悪を作る結果となるのである。然るに如来の誓願の絶対の不可思議は、如何なる罪惡の者をも救済せずんば止まぬという真心徹到である。何ぞ知らん姥捨山に親を運びつつある子供の帰り路のために結んでくれた親の道しるべである。親は勿論一念も帰る心はない。ただなきあとの子供のためである。「奥山に枝折り枝折るはたがためぞ、親の身すてかえる子のため」という道歌がこれである。

これが誓願の不思議である。名号の不思議、仏智の不思議である。此の如く仏願の生起本末を聞きたる時、かくまで深き親心かと自覚すると同時に、從來認めなかつた、親を捨てた不孝の罪惡を自覚するようになるのである。これが所謂凡愚底下の罪人なりという深刻な慚愧懺悔の念を生じるのである。是が信仰生活の根本である。思想界に於ても、この真心徹到の他力全剛心ほど、徹底を極めたものはあるまい。

ここに注意すべきは、此の如く罪惡自覚を徹底せしむるものは、姥捨山の親心が如何なる不孝の子供をも飽くまで悲憫して、真心を徹到せずんば止まぬという不思議の絶対力より生じるのである。不孝をしてはならぬ、親を捨ててはならぬと、子供を律法主義をもって呵責嚴罰することと誤解してはならぬ。故に歎異抄に曰く「御消息に薬あれば

## 近 角 常 観

を極めているのである。その者がそれ以上にわざと好んで罪惡を作れるなどいふ余地があるはずがない。

要するにこの邪見は本願の不思議といふことが徹底していないところから生ずる放縦思想である。ややもすれば思想界に於ても自由主義の人々が陥り易い傾向である。若し人間主義の立場から見るときは、本能の命ずる如く偽らず自然に発露するものがあるがままに是認するときは、知らず識らずの間に放縦な自然自由の悪思想に陥る恐れがある。

もと／＼人間主義の立場であればこれこそ何等拘束なき解放された偽らざるものと考えられるかもしれぬ。されどこれは人間以上の絶対救済の不可思議を認めぬからである。姥捨山に親を運んだ子供が、親の道々つくる道しるべを、親自身が帰るための仕業なりと冷淡に見て居る間は、親を捨てつつ罪惡自覚の念は起らぬのである。

人間主義に立ちて如来の親を認めぬ者は、自然に放縦思想に陥るのである。たとひ如来の親を認めても、子供の放

とて毒を好むべからず、とこそあそばされて候は、かの邪執を止めんがためなり、またく、悪は往生のさわりたるべしとはあらず、持戒持律にてのみ本願を信すべくば、我等いかでか生死をはなるべきや、かかる浅ましき身も、本願にあいたてまつりてこそげにほこれ候え」と。

諺に所謂義に懲りて膾を啜るの風情にて、思想界に於ても自由放縦の弊害を矯むるがために他の極端に走りて、律法主義、嚴罰主義が主張される弊がある。正義を高調し、義人を標榜して、自ら進んで犠牲となることを甘んじて、知らず識らずの間に他を犠牲とすることを顧みず。自己を絶対なりと過信して、甚だしきは罪惡殘害を極むるに至るのである。世の所謂鬭争の世界、動乱の巷を生ずる所以である。此の如く正義を主張し、律法主義に陥るも、またこれ如来の誓願の絶対不可思議を信せない自力根性から生じるのである。

親鸞聖人が御消息に「薬あればとて毒を好むべからず」と仰せられたは、確かに放縦主義の毒を誡められた教誨である。然るに聖人は教行信証の信巻の大信海の釈には「如来の誓願の薬は能く智愚の毒を滅するなり」とある。若し御消息に毒と仰せられたのを放縦主義のこととすれば、所謂悪くてもよい、愚でよい、という愚痴無智の毒といわねばならぬ。然るに放縦主義の愚痴無智の邪見ばかりが毒で



はない。やはり人間の小智をもって、我心得顔に律法主義を主張し、自力根性を以て学問を高調し、義人智者を以て自任する者も、是また凡夫小智の毒といわねばならぬ。これもまた同じく如来の誓願不思議の絶対救済の薬を戴かぬ故に起つた不徹底である。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という金言は、絶対他力の意趣を闡明するものとして、世上に喧伝される次第である。いやしくも歎異抄を繕く者は、一驚を喫する名文句である。然るに世の所謂自由主義者は、これすらも動もすれば放縦主義に解する恐がある。これは上記の絶対他力の救済の意趣を徹底しないために起る誤解である。世上物質救済に於ても、救済は貧民のためである。然らば精神救済に於ても、その救済の本旨は心の貧しき者のためである、心の愚なる者のためである。

罪悪救済の本願他力の意趣もまた同様といわねばならぬ。「善人なをもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」という如来絶対救済の親心は、一点も疑う余地はない。この真心徹到した時、放縦主義の思想を慚愧して「煩惱是足の我等はいずれの行にても生死を離れることあるべからざるを憐れみ給いて、願を起し給う本意、悪人成仏のためなれば、他力を頼みたてまつる悪人もとも往生の正因なり」と罪悪自覚のもとに不思議の本願に帰入するのである。和讃に「不思

毒を好むべからず」という聖訓は、この如く自力主義、律法主義にも応用することができる。

善人が善人だから往生するのではない。歎異抄に曰く、「自力作善の人は、ひとえに他力をたのむ心かけたるあいだ、弥陀の本願に非ず、然れども自力の心をひるがえして、他力を頼み奉れば真実報土の往生を遂ぐるなり」と。全体自力作善の人は、たとひ如来を頼みても、絶対他力の不思議の親心を信ぜずに「さすがよからんものをこそ助けたまわんずれ」と思ひ、自力作善と、智慧を雑えるのが「ひとえに他力をたのむ心」がかけているのである。これが誓願不思議を疑うのである。

然るに不思議の親心は、曾無一善、罪悪深重のものを助くる真心であることが徹到した時、自力の心をひるがえして他力を頼み奉る真信が起るのである。ここにおいて憍慢の鎧を脱し、我執の障が砕けて、絶対他力の不思議を信ずるのである。これが「善人なおもて往生をとぐ」という意義である。信巻に、所謂如来の誓願の薬は、愚者のみならず、能く智者の毒をも滅すとある所以である。

全体不思議というは如何なる罪悪の者をも救済するという意味である。と同時にこの如き不思議の救済は、凡夫自力の智慧を以ては思議すべからざるものなりという意味をあらわされている。故に「善人なおもて往生を遂ぐ、いわ

議の仏智を信ずるを、報土の因としたまえり、信心の正因うることは、かたきがなかなおかたし」とあるは、如何にも不思議の親の真心が徹底して、大悲の膝下に感泣し、光明の慈懷に摂取される有様を示されてある。

「他力をたのみ奉る悪人」というは、勿論それ自身悪人たることは云うまでもないが、悪人が我こそ悪人なりと自覚して、他力を頼み奉る真信を生じたる有様である。然るにたといそれ自身は悪人であつても、我悪人なりという自覚を生じない時は、反対に、我善人なり、智者なり、義人なりという憍慢心を生じる様になる。その時は「悪人なおもて往生を遂ぐ、いわんや善人をや」という正反対の格言が自分に適切となる。これ即ち我こそ智者なり、善人なりという疑心の善人、自力小智の毒を好む者といわねばならぬ。

然らば、この如く善人智者を以て自任する憍慢の者が、如何にして他力に入ることが出来るか。これまで如来の誓願不思議の絶対の親の眞の薬は、この善人智者の毒をも滅して下さるのである。全体「いわんや悪人をや」という方は救済の本旨に徹底し易いけれども「善人なおもて往生をとぐ」の方は、ややもすれば却つて不徹底に誤解する恐れがある。万一善人であるから往生をとげると思ふならば、それこそ薬あればとて自力作善の毒、凡夫小智の毒を好むことになるのである。してみれば御消息に「薬あればとて

んや悪人をや」という金言は、罪悪救済の不思議を徹底すると共に、この如き不思議は大小の聖人すらも思議すべからず、補処の弥勒菩薩を始めとして、仏智の不思議をはかろうべきに非ず、まして凡夫の浅智をや、かえすく如来の誓に任せ奉るべきなりという意味がある。大小の聖人の善人すら、自力をひるがえして往生を遂ぐ。龍樹菩薩の如き歡喜地の聖人、浄土論の二乗雜善の善人すら、願海の不思議を計らうべからず、いわんや輕重の悪人、凡愚底下の罪人をや、唯不思議と信じ奉るべしという意味である。

歎異抄十五条に「おおよそ、今生において、煩惱悪障を断ぜんこと、極めてありがたきあいだ、真言法華を行する浄侶なおもつて順次生のさとりをいひのる。いかにいわんや戒行慧解ともになしといえども、弥陀の願船に乗じて云々」とあるは、聖道門に比較して、浄土門の来生の開覚を主張し、当時煩惱具足の身を以て、既に現在にさとりを開くという異義を正されたものである。畢竟当時の有念、無念、尋常、臨終、多念、一念、等々の両極の異端を正されたのである。是において之を観るに、誓願不思議の如来の真心は、放縦主義も、律法主義も、邪見も憍慢も、左傾も右傾も、あらゆる思想界の善、悪、智、愚の毒を滅して下さるのである。

ここに甚深微妙の含蓄極まりのない上記の大信海の釈文



を詳記して筆を擱くことにする。曰く、凡そ大信海を按ずるに、貴賊縮素を簡ばず、男女老少を謂わず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず。有念に非ず、無念に非ず。尋常に非ず、臨終に非ず。多念に非ず。一念に非ず。唯是れ不可思議、不可説、不可称の信樂なり。たとえば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如来誓願の藥は、能く智愚の毒を滅するなり。

(信界建現)



### 盤珪禪師の歌

世にありて世と遠ければ世の中の人に見られて独り住むかな

みな人の悟と思ふさとりこそ 繪にかく餅をかきやあらそふ

湖上の月

仁保の海や空も一つに映り来て浪より出づる月を見

達磨の絵を需むる人

我にある活ける祖師をばすておきて外に求むる紙の達磨を

春は花 秋は紅葉の色々も 皆そのままの法のことの葉

池水に打むかいて

さしむかふ心は清き水かがみよしあしうつるかげはとどめじ

### あゆみの跡

彼の相手の人の怒れるは、我が自身の心の反影なることを思わずして、彼れの怒りに対して、我れまた瞋るの、これあたかも、水の瀬に石を投じて、ますく水勢を激発せしむることである。

更に思わねばならぬ、衣裳に刺鋒はなきものと知るべし。然るに衣裳の裂けほころびたるは、必ず荆棘などのあるによりてなり、これ我等の荆棘にこそ刺鋒はあるなり。

されば我れこそ刺鋒のあるものなれば、我れ自ら怒る前に、先ず彼れを怒らせたるは、誰なるかを思うべきである。

我等常に疾病者を導き慰藉せんと思えり。然るにかえて彼の疾病者によりて、我等自身こそ教導せられ奮勵せしめらるることの偉大にして且つ尊重なることを思い到らしめられたり。

### 白杵祖山

文珠菩薩が、維摩居士の疾を問いに、居士に病を問う方法を尋ねられたるは、是れ全く慰問者たる文珠の、疾病者たる維摩居士により啓発され教訓されたる真状を明かされたる尊き道味を知らざるものなり。

或る人の申されるに、それでは常に懺悔しつつ行けばよいのでしようかと。

それに対して、そうすればよいとか、わるいとか云うことは不徹底であります。よいとすれば、それではそのよいことが全部出来るかと押詰められて見れば、なか／＼それはゆかない。それでその出来ないことに縛られて苦しまねばならぬ。又わるいとすればいやが上にもその悪いことに悩まされるのであります。

つまり、善い事であるとするものの全部が行われず、悪い事であるとする全部がやめられない、そこで善悪、邪正の両端にかかわって、何れも徹底しない苦悩を持つのであ



ります。

善悪の両端二頭を俱に切つて必ず名号の利劍こそ、真実の活人劍の一閃である。つまりは前後左右に目をくれぬ無学不覚の境地に南無阿弥陀仏と念仏させて頂くばかりである云々。

○  
我が歳きわまりて、安養浄土に還帰すというとも、和歌の浦曲の片雄浪の、よせかけ／＼帰らんに同じ、一人居て喜ばば、二人と思ふべし、二人居て喜ばば、三人と思ふべし、その一人は親鸞なり。

我れなくも法はつきまじ和歌の浦 あおくさびとのあらんかぎり

弘長二歳十一月、愚禿親鸞満九十歳

この御書を拜しても、衆生無辺誓願度の太苦惱の比類なき尊さが仰がれます。「片雄波のよせかけ／＼帰らんに同じ」とは、それはかの紀州和歌の浦曲のことでなく正しく私達の煩惱随煩惱の心の浪の寄せかけ／＼起り続けて来る一の中、面々衆生の機ごとの中に、聖人の御生命を打ち込み／＼、寄せかけ／＼たまう大慈大悲の本弘誓願であります。「普賢の徳に帰してこそ、穢国にかならず化するなれ」と御和讃遊ばされた真実証の顕現は、全く報恩謝徳の大行でなくしては成就されないものであります。

十二月十八日

我が身の分際をかえりみずして、濟世とか利民とか布教伝道とか興学究理とか、云つたり思つたり、出放題なことに快哉を叫んだこと、又叫ぶことなどにつけて、自分を省察するときに、世を濟うと云うよりもむしろ濟われて居るのであり、民を利すると云うよりもむしろ利益を蒙ることの多大であり、教を布き道を伝えると云うよりも、教えられること、伝えられることの偉大であり、学を興し理を究むと云うよりも、学によりて興さしめられ、理によりて究めしめらるることの深遠であることを仰望したい。

私によつて濟われる世、また利せらるる人、布かれる教、伝えらるる道、興さるる学、究めらるる理、などの自己の誇張をはからんより、もつと／＼謙虚にして真摯であらねばならぬことを感ずる。

○  
自から働き、自から勤め、自から食らう。これ如来の与えたまえる力なり、他力の慈悲はいつ／＼までも向うのみにあるものにあらず、必ず我等の自力となるまでに同化力を有したまへり。

されば我等の自力の全体は、これ如来の同化力なり。

大正二年一月十七日

○  
真実の如来は、如来なりという自己誇称の自覚なし。何故なれば、自己の自覚なきまでに我等人間に同化し融応したまえるなり。

○  
自己実現、自己実現など世間によく言うが、それを凡夫意識の上に実現せんとするは、むしろ迷執の自我の拡張に過ぎず、それは最もおそるべき根芽のきざしである。

○  
南無阿弥陀仏

信仰とは、吾等が如来の大慈悲に對したてまつりて、ただ最も親しく近く、我等が身も心も、すでに／＼撰取救済したまえる無限の大慈悲を信仰するものなり。

然るに思わざるべからざることは、我等が信仰し奉るに先んじて、如来の大慈悲はもとより我等を撰取したまえることなり。

されば我等の信仰し奉る全体これひとえに如来の救済せざんばやまざる大誓願力の顕現なり。經に、先意承問と説きたまえるもの深く仰崇すべきものあり。

畢竟するに、如来先ず我等を信仰したまえる念力の徹底せるものこれ我等の信仰なり。

○  
一、自から不徳の身たりながら、世を濟い人を度すなどとは、誠におそれ多きことなり。それよりも先ず自己を濟い自己を度すべきこそ一大詮要なり。これぞ如来の我等に御指示を垂れたまえることなれば、我等においては、ただだ現今の境遇こそ自己濟度の道場なりと、専ら南無阿弥陀仏々々々々と念仏すること最大肝要なり。

一、我等の言いしことも、行いしことも、また善と云い悪と云い、美と云い醜と云い、其他一切のことは、ことごとく虚妄にてこそありしなり。過ぎしことの然るが如く、今と云い、当と云い、ひとしくこれ虚妄なり。

一、虚妄を虚妄なりと、一切を潔ぎよく棄捨すれば、天真玲瓏の玉として、心にかかる雲霧もなし。されど捨てようとするれば拈着す。離さんとすればへばりつく。有つて邪魔なく、無くて不足なしと達すること難し。

一、過去の一切を打解すれば、現在の安樂に逍遙し、未来の光明に照耀す。知見は易し、知了は難し。

一、過去を追想すれば、慚愧もなく懺悔もなく、いわんや六根清浄など思いも及ばず。随つて現在憂鬱、未来暗黒なり。一擲打開すれば、氣大山の如く、心清水の如しとは云え、口は重宝、字は自儘、という諺のように、

云われもし書かれもすべし。されば壯語のあとの唇の寒さ、大書のあとの筆の寂しさを感ぜざるものがあるうか。いな

知了



他人でなし我れ、私一人は正しくその唇の寒さにふるえ、筆の寂しさにわななきつ、あり。我が祖師聖人が「ただほれぼれと、弥陀の御恩の深重なることをつねにおもひ出しまいらすべし、しかれば念仏も申され候、これ自然なり」等、と仰せあれど、ほれぼれどころか、しぶくながらも御恩を念じ御名を称うることだになき自分の浅間しき愚かさである。

一、この浅間しきに愚かさに、一度ここに自覚すれば一切の心念、また起居動静すべて御恩の懐抱中なれば、一片の恐怖も不安もなし、愉快であり安心であり、と語られる人の尊さを仰望し、かくなり得ざる自己を俯伏す。

一、殊更に心がけてなるでなく、全く自然の靈徳、法爾の妙用として、絶対無限の如来の御慈悲に引寄せられてのことなり。されば唯だ南無阿弥陀仏と称名すること尊しと。されど自己がその尊とさに達せられざる一大悲哀なり。「いよく願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱のころもいでくべし」との仰せなれども、なか／＼そのころの出で来らざることを恐ろしさである。

病患の苦みは我等の最も大なる法薬なり、また病患の人は我等の最も大なる医王なり。

我等は病者に対して、その苦を癒えしむるものにあらず、

## 信仰体験録

### 現世利益

一昨年のこと、私の家は世間的にも幸福な日暮しをして居た。その有様を評して或親戚の者が「安波がお慈悲を喜ぶお蔭で現世利益はどうですか、家は新しく求める、患者は多し、子供は丈夫に成長して家庭は円満、雇人は少しの不幸もなく家族同様に働く誠に信仰の徳は大きたものである」と、私の実母に語ったということを実母から聞いたので、「そんなものが何で現世利益であるか。私の家は私が六ヶ月も病氣して臥床すればすでに借金の始末に困る。家が焼けても、地震に毀れてもすぐに生活がおびやかされる。子供が病氣になっても心配になる。そんな不安な生活は現世利益でも何でもない。然し私が病氣になっても、家は毀れても、家庭は乱れてもビクともせぬ生活の出来る身にして貰うことが現世利益である」とお答えしたことがある。

実際そうである、今の私の家庭が現世利益である。死を宣告せられても、一度も眠られぬこともなければ、飯の食

病者かえって我等自から知るべからざる病相を知らしめ、そうして我等の病根を絶たしむるの最良の法薬なり。

我等は病者に対して、その苦を慰さめしむるものにあらず、病者かえって我等の自から知るべからざる苦痛を知らしめ、そうして我等の苦痛を慰さめしむる最良の医王なり。

二月十三日

出でても死の報知、入っても死の報知、ただ他の人の死の報知とのみ思えるは愚なり。全く自分の身の上の死の報知を自身の上を受け取りつつあることにてこそあるなれ。

然るにこれを思わずして徒らに人の死とのみ思い入るは浅間しき極りなり。

病気々々と人の身の上にながめ、我が身の上の大病に思ひ至らざるは浅間しきことなり。

悩める病人、苦しめる患者、これ悩中の悩を知らず、苦中に苦を識らざる、自から称して健康者なりと妄断せる我等に、苦の真情、悩の実際を見せしむる恩人知識なることを感謝すべきなり。

南無阿弥陀仏。

### 安波勲八

えぬこともない。宣告をうけてすでに三ヶ月、一日も休みなく平常と変りなく治療に従事している。私が平静で居れば妻も平静で、親戚も友人も平静、見舞の客は家に愁聲のないのを見て大いに喜び、信仰の力を讃えて帰る。一月下旬に女子が生れる、みんなが祝って呉れる。妙子と命名する。妙は絶対の境なり、真如の妙境界也と書いて見る。長女を道子と呼び、長男を勲と云う。「道を求めて真如の妙境に達したる私の一生は勲功赫赫である」なんて義弟に戯書する。昼は診療に従事し、夜は遠近の法友の見舞をうけ大悲を讃歎してほとんど寧日なし。また未知、已知よりの見舞状多きは日に数通。まことに私の只今の生活そのものこそ現世利益である。仏の慈悲の高大なる、誠に尊むべし、あがむべし。

### 池山榮吉氏夫人

始め主治医の末綱さんから胃部の腫瘍を图示せられた時



に「しまった、手遅れした」同時に「大丈夫間に合った」  
——（註・信仰問題について）と喜ばせて貰ったことは前に述べた。その瞬間に、私の頭に飛んで来たのが池山夫人である。池山夫人と云うのは、当時の岡山第六高等学校教授池山榮吉氏夫人で、大正六、七年頃胃癌にかかられ、突然それを医師から注意されて卒倒せんばかりに驚いたが、成程かような哀れな奴をお見捨てないお慈悲であったかと気付かれるなり胸が楽になり、結構な念仏の生活を続けられたお方である。この夫人のお話はその頃求道会館で直接近角先生から承り大変有難く感じ、それから後も時々「求道誌」を取り出しては御縁に合わせて貰うて居たのであるが、此度はそれが話でなくして事実その通り私の身に降りかかってきたのであるから「成程そうかく」とうなずかせて貰うた次第である。その内で殊に私の胸を強く衝いたのは、池山夫人が近角先生から向坊さんのお話を聞いて大変楽になられたというお話である。先生が夫人の病中御見舞に行かれた時に、夫人の喜びが余りに大きいので皆の人が「不思議じゃく、只事で無い」とまるでやし立てて居るような気楽な話になって居て、今癌で逝こうとする人の心持を汲んでないのを叱りて「もうあなただけ聞けばよいではないか」と云うて、其頃撫順炭坑の爆発で一命を拾うた向坊さんの話をされた。向坊さんは日頃から強信のお方であ

るが、突然の爆発に遭うて人事不省となった。其時に「失敗った」と大声を発したそうである。幸いその声を聞きつけて皆で担ぎ出し、直ぐ酸素吸入器をかけているうちに、南無阿弥陀仏々々と息を吹きかえして来られたそうである。先生がこのお話を聞かれた時、あれ程喜んで居る人が南無阿弥陀仏ならともかく、失敗ったと云うて倒れたのはおかしい様な気持がした、けれどもよく考えてみると、「失敗った」より外この時出ぬはずである。爆発で倒れる時のみでなく吾々病気で倒れる時もこれに違わぬのである。「失敗った」より外ないはずである。処がかく失敗った、残念だと叫んで死ななければならぬその残念さを「さぞ残念だろう、その汝を何処までも見捨てぬぞ」とこのお慈悲が聞える故、心の中に「有難い！」それで死ぬ故、死ぬ時心の中が南無阿弥陀仏、従って目が醒めた時、南無阿弥陀仏が出たのである。向坊さんは娑婆へ目を開かれたのであるから、娑婆で南無阿弥陀仏となったのであるけれども、これが未来へ開かれたのなら極楽へ南無阿弥陀仏となられるのである。

このお話を聞いて、意外にも夫人が大変喜ばれて、云われたには「実はこの間からひどく腹が痛むと、折々念仏しようにも出来ぬことがある。たとえ念仏は出来ぬとも、お見捨てなきお慈悲で必ず浄土へ参らせて下さることはいた

だいて居るけれども、今この有様では愈々の時どんな有様で引きとらせて貰えるか、みんなの人から大往生遂げるものの如く思われていて、自分は構わぬけれども、いらぬこととて人に誤解を与えはせぬかと気になって居た、処が今のお話で愈々の時、『失敗った』の一言しかないのが本当とお聞かせ頂き、初めてその心配がなくなつた、私はたとえどの様な有様で終ろうと、たとえ失敗つたで亡くなるうと、皆案じることはないことが分つて大変らくになつた」と。  
私は池山夫人が向坊さんのお話を聞いて大変らくになつたという此話が大変有難かつた。愈々胃癌と確診され、手遅れと宣告されても、この何とも仕様のない奴と、お見捨てなきお慈悲に腹ふくらせて、池山夫人のように歓喜に満ちた日暮しをさせて貰えることは誠に仕合せである、同時にいくら喜ぶと云うても、いくら信仰に徹底して居ても、これから先病気が進んで来て、痛みがひどい時、又いよいよ臨終の時は、「失敗った」より外ない私である。この、「失敗った」より外ない私をお見捨てないお慈悲のみが私の生命であり、力である。縁ならばこれから先どんな見苦しい態をするかも知れぬ、臨終にはジタバタするかも知れぬが、そんな問題までも片付けて貰うて居る、現在の問題も、臨終までの問題も、未来の問題も一切解決させられて、一点のくもりもない、誠に有難いことである。

### 成道の歌

佛教音楽協会

金剛の御座はゆるがず 菩提樹に 朝風たちて  
明星の光りがやき 華ぞいまほほえみにおう

煩悩の けがれにしまぬ ニルバナの 大空すみて  
天上の 調べほがらに 鳥ぞいまよろこび歌う

大聖の さとり円かに 御めぐみの 海原ひろく  
こぐふねの 行方はるかに 月ぞいま我等を照らす





# 青蓮華(五)

井上善右エ門

○おほけなく なむあみだぶつとききまつる わが煩惱のあやにいとしき

最近、三十年前の日記の断片が、はしなくも棚の片隅から出てきました。それを読んでみて思うたことは、三十年前の私の自性は全く今のこの身と変っていないということ、腹が立つと二、三日余憤が続く煩惱の姿も同じことです。本能的な欲望の退化はあってもその本質は決して変わってはいません。これが真正正銘の私の実態なのだと思ひ知りました。

煩惱から脱して何とか少し涼しい身になりたい。聞法して努力したら少しは良くなるだろう、これは永年の思いでした。しかし私の煩惱というものはそれで始末のつくようなものではなかったのです。『歎異抄』に唯円房が「念仏申し候へども踊躍歡喜のころ、おろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは……」と聖人にお尋ねしている心の奥にも、少しは良くなる筈だとい

無意識の思いが宿っていたのではありませんか。

しかし真の宗教的回心こころというものは、そうした思いとは異なつたところにあります。煩惱を除去に消してゆこうというのは、むしろ道徳的努力の問題です。今広大な阿弥陀仏の眞實心に値遇してみると、煩惱を始末しようと焦っていた心もまた煩惱の一種であつたことが知らされてきます。色で色を消そうとしていた矛盾が無意識の焦燥感となつていたのです。そのわが身の全体を仏の智慧は照し知らしめて、その煩惱を撰取せずばおかぬ大悲の光をこの身にとどけて下さいました。聖人が唯円房に「仏かねて知ろしめて煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりと知られていよいよたのもしく、覚ゆるなり」と申された言葉には深い寂かな安らぎがただようています。

今まで狂いもし焦りもしていた煩惱が如来の大悲に値遇したのです。すると不思議にも煩惱が今では、如来のみ前

に頭をうなだれて大悲を仰ぎまつつてはありませんか。それを思いこれを見ると、憎かつた煩惱がわれながらいとしくなります。「わが煩惱のあやにいとしき」という先生の一句には、こうした趣きが私には感じられるのです。悪童の性は変らないのですが、ただ一つ変つた事はその悪童が大悲の親の前に坐つて頭を垂れているのです。これは不思議な光景と言わねばなりません。この世の業が尽きたとき煩惱もまたみ光に一味になりましょう「不断煩惱得涅槃」と誦されたお心が偲ばれるのです。

○稲穂みな垂りに垂りたる田のおもをしづけく照す夕陽影かも

寂かな美しい一首です。人間には老少善悪賢愚の別があります。そこに傲慢や卑屈など差別の争乱が生じます。賢者が自から高しとしているほど見苦しい姿はありません。自みづからを賢なりと思う心が、実はその賢者の能力をも閉ざす結果となります。欲心や野心のあるとき眞実を見る眼は曇ります。芸術家においても学者においても然りです。まして宗教の道を辿るものにおいておやです。

聖人が「愚禿の心は内は愚にして外は賢なり」と申されたところにこそ、まことに己れを愚として執自の思いを超えられた姿があります。その事は独り、仏心の眞實に照らさ

れて成る開眼です。ここに人間のまことの更生があります。各自に与えられた分を果して用に立つ道が開かれます。

善悪賢愚みな共に、仏心の御前に始めて本當に頭を垂れる身となります。実り豊かに稲の穂が等しく頭を垂れて黄金の波を打たせている田の面を、しずかに大悲の夕陽が照りわたる。ここにこそ人類永遠の至高の未來が約束されるのではありませんか。

○縮毛ちぢげの紅毛の髪となりにけり 大和乙女の直き黒髪なほ  
○我れをのみ正しとよびて他を責むる 迷の渦に国は論はなびん

先生には一面、鋭い時代批判の眼が光っていました。今の二首はその事をよく物語っています。個性の眞の陶冶の上にごそ人間の美は実現されるものとの信念を先生は抱いておられました。それはかつて若き日（昭和四年四十一才）ドイツのイェナに留学しておられた頃の事です。ある日、公園のベンチに憩いつておられると、ドイツの娘が近づいて来て、しげく先生の髪の毛を見ているのです。や、あつて、アッハ シュワルチエス ハール（ああ何という黒髪でしよう）と感嘆してうち眺めたというのです。この時、日本人に恵まれた黒髪の美に気づかしめられたと語られた事があります。しかるに近頃の日本娘は、西洋人の眞似をして

徐々



毛をちぎらせ、あまつさえ染めて紅毛として得々としていく。先生は慨嘆されずにはおられなかつたのです。現代女性には異論を唱えるかもわかりません。しかしそこにどれだけの自覚があつての事なのか。先生の気持は痛いようにわかるのです。美とは何か、真の美とはそもそも何か。

第二首は特に戦後の風潮に対する批判です。自己の自覚の名のもとに、果しない自己主張が蔓延する、自が主張すれば他もまた主張する。撞着と混乱は至必と言わねばなりません。その源は何か、自己を無条件に正しいとして顧みない我執、そこに生れる無意識の精神的エゴの跳染であります。この傾向の増長してゆく世相を感じます。

執我は身をほろぼし、国を論はず。それはやがて世界と人類全体の運命にまでつながってゆきましよう。思想の対立と大國の角逐も、元をただせば執我とエゴという人間存在の迷いに淵源するものではありませんか。この迷いを照し、その惑業を治するものこそ仏の大悲であることに思い至らねばなりません。

### 裂

人生のおのおのの時期は、それぞれ固有な成果をたくわえて残すところがなければならぬ。子供時代は子供らしさを残すべきであり、子供時代に子供らしさのないような人は、他人にもいい影響をあたえるような完全な人間とはならない。青年時代は実行力の源泉となるような新鮮な気分と張りを残すべきであり、壮年時代はすべての思想と感情の円熟、および過去においてさまざまな行為をなしたとげたことによつて鍛えられた性格の堅実さを残すべきである。

このようにして初めて老年もまたそれにふさわしい使命をもった時期となりうるのだ。すなわち単に慰めのない衰退ではなくて、ありのままの人生のすがたを静かに所有しながら、あるべき人生のすがたを達観しさらに壮大な、これから先の発展にそなえる準備の時期となりうるのだ。

### ヒルティのことば

## 慈光日誌抄

——無相さんのお手紙——

(一) 菅さんからの問い合わせ

先般、山陰・浜田に赴きましたとき、光現寺の若院、菅和順さんから、同氏の祖父・菅真義師著『妙好人・有福の善太郎』（百華苑刊）をいただき。さらに、その和順さんから、左の主旨の懇篤な書簡がとどく。

その要旨は、以前から、無相さんの『念仏詩抄』にある「法蔵さま」と題する詩に、

涙には  
涙にやどる

ほとけあり

そのみほとけを

法蔵という

詩を、感銘深くいただいておりました。そのところ、江津市の故嘉戸大恵師の遺稿集『宿善』の扉に、「涙には涙に光るほとけあり、そのみほとけを法蔵という」詩の短冊

西元宗助

の写真が載せられてあるのを知りました。それに龍大時代の自分の後輩が、これは（涙に光る）は曾我量深師の詩だといつて、自分で書いて部屋に飾っております。それで、おついでこの節、無相先生に伺つてみていただけないでしょうか、とのことでありました。

それで私、とりあえず、この詩を曾我先生の作というのは論外で、原作は紛れもなく無相翁の作であること。なお嘉戸氏は多分、この詩に非常に心うたれながらも、しかし、「涙にやどる」よりも、「涙に光る」としたほうが、とお感じになつて、そのように短冊に書かれたにちがいない。しかしそのため無相作とするわけにもまいらず、さりとてご自分の作とするわけにもゆかず、それで無署名になさつたにちがいない。いずれにしてもその旨、無相さんにお伺いする、ということになつた。



(二) 無相さんのお手紙  
ナムアミダブツ ナムアミダブツ

昭和五十八年九月二十六日(月)ゴゴ三時半、和上苑の二階の自室のベッドにて仰臥しつづ、ますます難聴、半盲の無相より

西元宗助先生 (前略)

遠方よりの来客にて五時間、六時間と、お話相手しまして、前々から疲れていますので、とうとうカゼ状態になり、セイテ、セイテ、セイテおります。今も起きて机で書こうとしましたが、とても書けそうもないので、またベッドにねて、あおむいて書きはじめました。これは、とても書きにくく、目も腕もスグ疲れて、休み休みにしか書けません、明日までのばしても、起きて書けそうにもないので。

さて、お手紙ありがとうございました。先般、島根へ行かれました時のこと、嘉戸師の遺稿の扉に

涙には 涙に光るほとけあり そのみほとけを 法蔵  
という

とありました由、それはまことに意外のことにて、ありがたく、なつかしいことであります。私の歌は、ご承知の通りに「涙にやどる」であります、嘉戸様は「涙に光る」といだけられた由で、まことにありがたく存じます。

「涙に光る」は、「光る」と体感された嘉戸大恵様のお歌と私はいただくことであり、「涙にやどる」の方は、無相作なのであります。

しかし、よくまあ、あの歌に心をとめてくださって、しかも「やどる」を、「光る」といだけて下さったことよと、嘉戸様をありがたく、おなつかしく存じあげることでもあります。

さて今なら、どう書くであろうかと考えますと、やはり表現としては、あのままでよろしく、しかし、その「味わい、感じ」が四十年前とは違って、あのころのように感傷的ではありません。

それにしまして、先生がお会い下さった浜田の若いお坊さま、おなつかしく存じます。どうかどうか、およろしく、お取りつき下さいませ。

それに嘉戸様の遺稿集の扉に、ドナタが、お取りあげなされたことか、ありがたいことでございます。

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

○  
それから

わたしの信心

雪ダルマ

オテントさま出りや

す。

あの歌は昭和十六年一月から昭和十七年十二月まで、

(三十七歳から三十八歳まで) 三重県の光明寺の松原致遠先生(当時朝日新聞に「超日月光」を執筆して有名)の御膝下でお育てをいただき、先生がムスコさんにお寺をゆずられたのでお暇して、開法行脚。その途次、岡山県長島の光明園・癩療養所で昭和十八年八月まで奉仕的に勤めて肺を病み、そのため退いて、長崎県雲仙の海岸の小浜温泉の同信の三等旅館にて静養させていただいていた時、フト出来ました歌で、まだ「光り」に遇っていない時の、ごく感傷的な気分の歌―詩でして、病床にて、

涙には  
涙にやどる  
ほとけあり

と、ナントナク感じたままを歌にしたので、とてもとても、「涙に光る ほとけあり」などは体感できない状態での歌。もうちょうど四十年前の歌、それを『念仏詩抄』(永田文昌堂刊)編集の時、ふっと思い出したので書いたのであります。

そんな程度の、「光る」とまでは感じられていない、なんとなく感じた程度でしたので、「涙にやどる」と書いたのですから、これは無相の歌にちがいないのですが、

すぐとける

オテントさまが

ご信心

を、今だに、お取り上げ下さっているとのこと。まことに有難く有難く、厚く厚くお礼申し上げます。あの詩、とりあげていただだけで「念仏詩抄」刊行の意義があったと、ありがたくありがたく存じております。

あの歌は、タネ本があるのでして、私が、さんさん「雪ダルマ」信心をつくったり、こわされたりしているころ、ある同行さんが、「チヨコチヨコ信心、数しれず、と云ってナア、お手製の一夜つくりの信心が、百ペンも二百ペンも、出来たりこわれたり」と、いうのを聞いて、私、同じことをするものだなアと思っていましたが、『信者めぐり』という本の中の「三河おその同行の物語」に、「雪ダルマ信心」のことが書いてあるのでして、このところのご縁にあって、すぐ、あの「わたしの信心 雪ダルマ」の念仏詩が出来たのです。(中略)

○  
さてついでに、同じく『念仏詩抄』の中の「信行両座」についてのこと、書かせて頂きます。合掌 夕食後五時半から再び。

ナムアミダブツ ナムアミダブツ



『註』本詩十一月号の拙稿「慈光日詩抄」に、まったく偶然に、無相さんの「信行両座」の詩を讀んでおりました。実は、この拙稿を郵便ポストに投函して帰宅してみれば、このご書簡が届いていたのであります。

コレコレ おまえは  
行の座か――

コレコレ おまえは  
信の座か――

イエイエ わたしは  
願の座に――

この念仏詩は、(東本願寺)同朋会館門衛時代の昭和四十五、六年かに、京極で法然上人伝か親鸞聖人伝かの映画を観ている時、「信行両座」の場面が映されまして、「オレは願の座」とひらめいたのです。願の座に座るということが「信」であり、私には、伝説?の如く、信の座か、行の座か、そのどちらかにも座るということは出来ず、また両方に「ペン」に座ることは出来ないで「願の座」と、ひらめいたようです。私にはいまだに「信行

その浄住寺にて十月三十日(日)、恒例の池山栄吉先生はじめ諸師友の遺徳を偲び御恩を謝する「一道会」が催される。会するもの、九州から四国から中国から東京から名古屋から、約八十名。八十三歳の徳草老師をはじめ川柳愛義、井上善右エ門、山田宰の諸先生並びに龍谷大学の村上速水先生。それに珍しくも東京の稲津紀三先生。いづれ詳しくは例によって徳草老師の玉文が掲載されるであります。よから割愛することにする。

浄住寺の山門のあたりの寂かな景観は、まことに浄土の影をやどし、家妻ともども、その苦むした石段をのぼるとき、生死のうちにあるながら、生死を超えるものよることを深くしたことであります。南無阿弥陀仏。なおその前日は、加州サンノゼの北条恵実師夫妻を迎えて久々の歓談。同氏は心を残しながら、一道会の日に帰米。

皆さま、本年中のご顧みまして、あらためて、どなたさまにもあつく御礼申し上げます。花田先生ご快方の報せに随喜いたしつづ。

両座」どちらかに座るといふのはオカシク思われることです。さて今日は、これにて失礼いたします。

ナムアミダブツ ナムアミダブツ (後略)

(三) わたしの日詩抄

無相さんからは、十月に入ってから、ひきつづいて長文のありがたいお手紙をいただく。また榎本栄一さんからも「(前略) いつのまにやら仏中心でなうて自我中心になりました。無相さんからも時おり、朝のお光を仰ぐ思いがいたしました。無相さんからも時おり、よき教をいただきます云々(略)」をいただく。まことに諸仏の證誠護念をまのあたりに拝する思いでございます。

十月十八日(火)には龍谷大学(深草)の報恩講に招かれ、千名前後(座席が足りない)で立って聞いてくださった学生数十名)の学生及び教職員の方々の前で、「現代に生きる親鸞」と題して、お話させていただいたのは、かたじけないことであります。わたしは脱線して思わず、本学の真の創設者は阿弥陀如来、本学の真の学長は御開山親鸞聖人わたしの尊敬する千葉乗隆先生はその代行でありますのであると、訥辯をふるう。なお千葉学長は、学生時代、榎原徳草師の浄住寺に三ヶ年間下宿した篤信の方、その同縁でわたしも親しくしていただく。

### 一指頭の禪

支那に俱胝和尚が知られて大悟した後は、人が何か仏法のことを尋ねると、何時でも誰にでも、指一本を竖てて示した。「如何なるかこれ禪」すうーと指を立てる。「如何なるかこれ仏」すうーと指を立てる。ところが不思議にも一切のことがこれでこと足りた。

寺に弟子の僧が一人居り、御師匠の真似をして、和尚が他所に行つて不在の時などに、指を立てて見せていた。俱胝がそのことを知つて、或時弟子を呼び「仏法とは！」と大きくと、弟子はここぞとばかり指を立てた。和尚は隠し持っていた刃物で弟子の指を切りつけた。弟子は「痛い」と云つてまっ青になつて逃げようとした。

その時すかさず和尚が「小僧！」と大声で呼び、弟子が振りかえると、すうと指を立てて示した。そこで弟子が豁然とさとつたと伝えられる。

この和尚が遷化に臨み大衆に対し

「天龍一指頭の禪を得て、平生思う存分に使ってきたが、ついに使いつくせなかつた」

と云い、すうーと指を立てて示し、そのまま入寂したと碧巖録に記されている。教えられることが多い。



# 随想断片

花田正夫

無一物中無尽蔵 有花有月有樓台

無一物と聞けば、世を捨てて山に入ることのように思ふけれど、そうではない。有と無を離れる、有るものに執えられず、無いことを嘆げかぬ境界である。仏教ではこれを妙有と呼ぶ。同時に智愚を超え、善悪を出た世界である。歎異抄には「善もほしからず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をも恐れなし本願をさまたぐる悪なきが故に」又和讃に「解脱の光輪きわもなし光觸かふるものはみな有無をはなるとのべたまう」とあり、更に教行信証の信の巻に、「如来誓願の業は、能く智愚の毒を滅す」とある。これ皆妙有の世界、無一物の境界である。

そこに紅い花には紅い光、白い花には白い光、黄な花には黄光を放ち、道元禪師の「春は花、夏ほととぎす、秋紅葉、冬雪さえて涼しかりける」と四季夫々の美しさがあると共に、人生の青年期、壮年期、老年期、死後と夫々にその

が猿を捕えるには柑塙に胡桃を沢山入れておくと、猿が胡桃を手一杯に掴むので手が抜けないでいるのを捕える。放せば出るのにそれが出来ない」とある。

甲斐和里子女史の歌に「岩もあり木の根もあれどさらさらとたださらさらと水の流るる」とはこの妙有の味わいである。更に古歌に「よしあしのなかを流るる阿弥陀川よしあしたえてかかる瀬もなし」も同じ味わいである。かくて無窮の大道がひらけてくる。

## 愛語よく回天の力あり

これは道元禪師の正法眼蔵にある名言である。これについて思い出されるのは、花や茶の師匠をしていた人が子供が出来ないので、男の子を養子に貰った。ところがほどなく実の子が生れたところ、貰い子は、もう自分は用事がないから、早く独立して家を離れようと思ひ、小遣いを貰うとすぐ貯金して、家では黙りこくって陰気な子になった。さて数年経った時、実の子が重病になり、その死ぬる前に、「兄さん、としきりに呼ぶと、これを聞いた貰い子の心が一変し、貯金帳を見せて、内心を打ち明け再び素直な子にかえつたと話して下さった。

さて、私共に愛語が出来るだろうか。盲で琴の名手であ

よきも見えて来るのである。

他山の石として、ソクラテスを思う、彼は「我は何事も知らざることを知れり」と自身が愚にかえつて白紙になつて真実を求め続けている。我々は心得ている、知っていると成つて、心に蓋をして生長が止つていく。彼は独特な会話術によつて心得顔の人の心の蓋を削いで、共に愚にかえつて友人となつて共に道を求めている。

実験科学の提唱者のガリレオ・ガリレイはギリシャ時代の学者の説にとらえられず、虚心に実験を続けて、科学の暗黒を破つて長足の進歩を促している。

ニュートンは落ちてくる林檎に驚いて、そこに眼に見えぬ引力の発見をしている。これも、つまらぬこと、あたりまえのことと見過していたことに驚異の眼をもつたところに発見があつた。

すべて問いの中に答えがある。自分で作り出した答では竹に木を継いだ様なチグハグになる。中国の逸話に「狩人

つた宮城道雄さんの随筆に「人々が喜びあう声を聞くと陰の音がし、悲しみあう声には陽の音がする」とある。西洋にも、「人の喜びをわがこととして喜ぶことは天使のみがよくすることである」とある。それというのも、内に、そねみねたむ煩惱が障えて、同喜同憂が出来ないのである。愛は理解からという諺もあるが、その原点である相手の身になれない私共には、愛語は出来ようはずがない。

最後に「衆生苦惱我苦惱、衆生安樂我安樂」と仰る仏のみが、愛語をせられるのである。西岸上に人あつて呼んで曰く「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らんすべて火水の難に墮することを怖れざれ」と、迷い子を持つ母親の心をもつて、弥陀仏は喚び続けて下さるのである。それがそのまま「本願の名号、南無阿弥陀仏」である。諸仏は徳を名にほどこす」とある。この本願を聞信して名号を称える時、煩惱の心は転じて絶対他力におさめられるのである。

わろからんにつけてもいよ／＼願力を仰ぎまい  
らせば自然のことわりにて柔和忍辱の心もいで  
くべし

私は近来だん／＼耳が遠くなつて人様の話が聞きとりに



くくなり、自然に黙りつくくなった。それに反比例して、煩惱の騒音が事毎に盛んになり、人に知られたら呆れられるような浅ましい妄念があまりに多いのに自分ながら呆れる、孔子の「小人閉居して不善をなす」とはこの事であったと省みさせられた。

悪いと解れば改めねばならぬが、妄念を地体とし妄念の外に別に心のない凡夫の身にはその始末がつかない。盤珪禪師の云われたように、血で汚れたものを血で洗ってもまた新しい血に汚されるばかりである。宗教改革者のルーテルも、洗えば洗うほど汚れる手と歎いている。

こうして、飽くなき利己の一念を持てあまして、とつおいつしていた時、フト歎異抄の十三章の親鸞聖人の表題の一句が、聖人が私の手を執って下さって、このどうとも始末のつかない私共を仏はよくしろしめして、温い大悲の御手をさしのべて下さるよと指差して下さる、そこに自然に本願を仰ぎ念仏に帰らされた。

すると不思議にも、妄念はすこしもすくなくはならないが、そこに光が射しこんで、妄念が転じて、やすらぎと、やわらぎの恵みをいただき、妄念が苦にならなくなった。自然のことわり、即ち本願力の御はからいによると知らされ、本願を忘れて、自分ではかかって行っていたことを愧じ入った。

さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしと  
こそ、聖人は仰せ候いき

貪欲・瞋恚・愚痴をはじめ八方四千の煩惱を具足した身は、業縁次第ではどういう業さらしをするかも知れない、と親鸞聖人がわが身にかけて仰言ったのである。さてこれを知らされながら、ひとごとと聞き流していたが、私の二十四歳の秋、身にもつ蛇蝎の心を持てあまして、どうにも始末がなくなつた時、全く誰からも呆れられ捨てられる身と悲歎に暮れた時、このお言葉が、聖人が私の手をとって下さってじかに呼びかけて下さっているのに気付き、そこに同心して下さる最大良友を恵まれたのである。

以来五十余年、煩惱の塊の身はすこしも変らぬが、いつでも何処でも、この慈語に導かれては念仏に帰えらされている。

三界孤独、独生独死の身ゆえに、旅は道連れ、世は情けと、しばしの仮の友情さえ喜ばずには居られられない世に、こうした久遠の友を恵まれたことは、まったく無上の幸慶である。

つくるべき縁あればつき はなるべき縁あれば  
はなる

人々から師と慕われていた聖人が「親鸞弟子一人も持たず」と仰言っている。そこに御自身が、仏の大慈悲心に満足されて、独立独歩しておられたからである。そこに水のサラサラと流れるように、縁あればつき、縁なければ離れると、来る者を拒まず、去る者を追わずという自由闊達な境地に立たれているのには、我執の強い私には全く驚異の外はない。

私が卒業して初めて大連に赴任し、知人が無いので友人造りに専念していた時、フト聖人のこのお言葉が胸を打ち、自分の淋しさから友を求める前に、仏心を存分に仰ぐことが大事であると知らされた。

そこに遠ざかれば忘れ、離れると疎んじる世間の鉄則を超えて、仏心に支えられた久遠の同朋を自然に恵まれてきた。この鉄則を超えるには翼が要る、急流を前にしては馬も立ち竦むでしようが、翼を持った小鳥は歌いながら越えて行く、人生の激流を超える翼は念仏一つである。

念仏は今一人の私である

ヘレンケラー女史が、献身的家庭教師のアンサリバンを讃えて「盲で聾で啞の私には外からの教師は無用である。無くてはならぬのは今一人の私である」と常に語っていた。外からの教師とは、ああせよ、こうせよとよい事を教えてくれるが、それが出来ない、仕方がないと捨て去る教師である。今一人の私とは、貴女は目が見えないのか、じやあ私があなたの目になりました、耳になり、口になりました、私になりきってくれる教師であると説明していた。

さて念仏は、唯信鈔文意に親鸞聖人が「釈尊がよろずの善の中より名号を選びとり給いて、五濁悪時、悪世界、悪衆生、邪見、無信の者にあたえたまえるなりとするべし」と仰言っている。これこそ、智目、行足の無い邪見、無信の地獄一定の者に、今一人の私となつて下さるのである。

万行諸善の道は、外からの教師である。それでは私は浮かばれない。盲で聾で啞のヘレン女史が、大学に学び、世界のあらゆる身体障害者を五回も巡廻して慰問し続けられたのは、今一人の私になつて下さったサリバン女史の力であった。煩惱具足の身とて、いずれの行にても生死をはなれ難い私に、智目となり行足となつて下さる名号こそ、なくてはならぬ大悲の御手である。



● **あとがき** ●

十二月八日は釈尊の成道会。ここに二元対立の相對差別の繫縛から脱し得ない人生に、絶對平等の光明がさしそめた、所謂人生の黎明を迎えた日であります。而も先年同じ日に、大東亜の宣戦の布告された悲しむべき日でもありません。仏陀の御目には如何ばかり御涙の流れたことであります。御しよか。

又近角常觀先生はこの日の前に浄土に還えられました。今回は如來の誓願によつて智愚の毒の滅しられる妙趣を讀仰下さいましたものを「信界建現」から頂きました。

あゆみの跡は、白杵先生の信仰生活の日誌であります。先生の信の歩みに一切の人生の事象がよき教として受容せられてゐるのを私共の心の鏡とさせて貰つています。

安波先生は別府で眼科医を開業せられた篤信の方で、御自身の体験をそのまま記述下さつたものであります。今回は特に先生が手術不能の胃癌の病中に述べられた貴重なものであります。そこに死の壁が破られる大きなともしびを掲げて下さいました。

井上先生の「青蓮華」の讃仰は、白井成允先生の信味を一器から一器にうつされた趣きを覚え、思はず襟を正されました。

西元先生は、木村無相さんの念仏詩をあたらしく信味下さいました。篤信の人は、仏智から語り且つ述べて下さい

ますから、片言、隻句が身にしみてひびく趣きがあります。無相さんの念仏詩にその光彩が感じられます。福島政雄先生が、「正覺大音響流十方」を讃仰された時「下手な人の打つ鼓の音は近くでは騒がしいが遠くに響かない。名人の鼓は近くでは静かで遠くまで響く」と云われました。

● **御案内** ●

※十二月十八日(日)午後一時半、一道会例会、鬼頭宅。

地名変更の御知らせ

※五十九年一月十五日から住居表示の変更が実施されますのでお知らせ申します。

※旧住所 名古屋市南区駈上町二丁目八十八番地

※新住所 名古屋市南区駈上一丁目十四—二十九号

定 価	半年	八〇〇円(送共)
	一年	一六〇〇円(送共)
編 集	名古屋市南区駈上町二ノ八八	花 田 正 夫
電 話	八二一七〇三七番	愛知県西加茂郡三好町大字福谷
電 行	八二一七〇三七番	坂 部 光 雄
所 在	名古屋市南区駈上町二ノ八八	慈 光 社
振替口座	名古屋	六二四七〇番
郵便番号	四 五 七	